多様な考えを認め合う児童の育成を目指して

－学級活動における合意形成までの話合い活動の工夫を通して－

富谷市立日吉台小学校　　井間　律子

１　授業づくりに関わる課題

これまで実践してきた学級活動における話合い活動では，一言も発言しないまま１時間を過ごしてしまう児童や，自分の考えを持っていながらも，強い意見に流されがちな児童が見受けられ，児童一人一人が等しく合意形成に関われていない状況があった。周囲の意見に流されずに自分の意見を持ったり，相手の気持ちや考えを理解しようとして聞いたりすることについて指導が不十分であったことや，少数意見を大切にしながら，互いに納得し合えるような話合い活動ができる授業展開にできていなかったことが要因の一つと考えられる。

２　研究の内容と方法

児童が互いの考えやよさを認め合い，一人一人が等しく合意形成に関わりながら話合い活動ができる授業を目指す。具体的には，以下に示す３つの手立てを中心に，学級活動における話合い活動の充実と改善を図っていきたい。

(1) 相手を意識した聞き合い・伝え合いの工夫

話合いの中で，相手の発言を受けた話し方や，共感を示す話し方をした児童の発言を取り上げ，相手の意見に理解を示した上で心配な点を指摘したり，代案を提案したりする姿が見られた場合には価値付けし，児童に意識させるようにする。また，必要に応じて，教師が児童同士の考えをつなげることで，相手を意識しながら話合いが展開できるようにする。話合い活動の準備として，自分の意見を伝えたり，相手の意見を聞いたりするときに使う言葉を蓄積しながら児童と一緒にヒント集を作成し，話合い活動の活性化をねらうとともに，表現に苦手意識がある児童の支援に役立たせる。

(2) 児童一人一人の意見を共有する工夫

全ての児童が自分の意見を持って話合いに参加できるように，「話合い活動シート」を活用する。話合い活動シートには，自分の意見とその理由を事前に記入させ，見通しを持って話合いに参加できるようにする。また，活動中は児童が多様な意見に触れ，自他の意見のよさを聞き合う時間を設定する。Ⅰ期は，ホワイトボードを活用して自分の意見を表示させ，意見の交換や意見の変化の把握に役立てられるようにした。Ⅱ期は，タブレット端末を活用し，表現に消極的な児童も含めた全員の意見を視覚的に共有できるようにしたり，児童同士が互いの意見を積極的に交換したりできるようにする。

(3) 自分や友達のよさを実感できる振り返りの工夫

話合い活動シートを活用し，授業の最後に本時の振り返りをする時間を設定する。また，帰りの会で振り返りノートに，友達のよさ，自分の頑張り，活動の反省等を書かせることで，客観的に自他を振り返らせるようにする。

なお，児童の実態把握については，学級力アンケートや絆アンケートを実施し，学級全体や児童一人一人の変容について見取る。学級力アンケートから学級として頑張っている点や，よりよい学級にするために必要だと思う改善点について児童に考えさせ，話合い活動を実施する時の議題への必要感につなげられるようにする。絆アンケートは，教師が児童の変容を見取り考察し，指導や支援に生かすために活用する。

３　実践の結果と考察

Ⅰ期及びⅡ期を通して，「学級の生活を振り返ろう」を学級活動の題材として設定し，話合い活動を行った。議題は，学級力アンケートを基にⅠ期は教師から提示した。Ⅱ期は児童に学級力アンケートを読み取らせ，全体で話し合う議題について考えさせることで，必要性を感じて話合い活動に取り組めるようにした。また，学級活動の時間の他にも，毎日の振り返りノートの記入と点検を行い，ヒントカードやタブレット端末を活用しながら，児童の個々の成長を丁寧に見取るとともに，指導の工夫と改善に努めた。

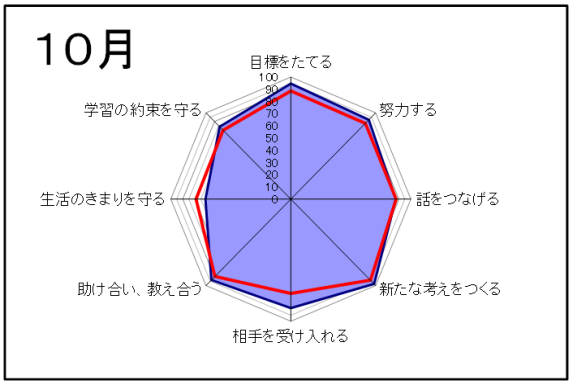

図１　学級力アンケートチャート図

(1) 相手を意識した聞き合い・伝え合いの工夫について

①　ヒント集の作成と活用

聞くとき，伝えるときの児童の手助けとなる言葉を

表示したシートを児童と一緒に作成した。どのような言葉を掛けられると話しやすいか，どのように聞いてもらえると話が膨らむかについて考えさせ，具体的な言葉として載せた。そのシートをラミネート加工して裏面はホワイトボードとして使用した。

実践授業では，はじめはヒント集に載せた言葉を使うことばかりに集中してしまい，ややぎこちない聞き合い・伝え合いの様子であったが，回数を重ねるごとに少しずつ慣れ，友達の発言に対し，自然なうなずきをすることができていた。また，児童の振り返りノートからは「うんうん」「たしかに！」など相手の意見を肯定的に聞いて反応する姿が良かったとの記述が多く見られ，どの意見も受け入れ，分かろうとして聞く児童が増えたことが分かった。学級活動以外の時間にも自然に活用する姿が見られ，「～さんが言ったように」など，相手の考えを受けた発言をすることが増え，一方的に聞くことだけでなく，聞いたことから自分の意見を深めて伝えようとする姿につながった。図２から，聞くことに対してⅠ期，Ⅱ期とも肯定的に捉えている児童が多いことが分かった。

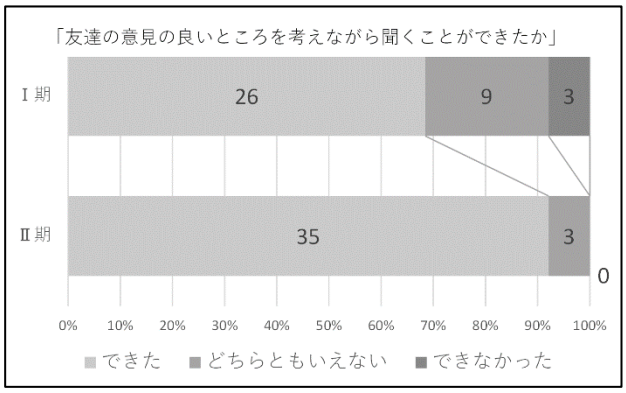

図２　話合い活動シート自己評価から

②　児童同士の考えをつなげる教師の関わり方の工夫

議長団を中心とした話合い活動の中で，教師は議長団では取り上げることが難しい児童のつぶやきを拾ったり，取り上げたりすることで，児童同士の考えをつなぐ関わりを行った。論点にせまるつぶやきや，話合いの方向性を示す発言を拾ったり「〇〇さんの続きの思いを伝えられる人はいますか」等の補助発問をしたりし，児童に相手を意識させ，一人の発言を全体に返せるようにした。

実践授業では，意見が多数寄せられたときに，「生活面で気を付けることと，全員で何かに取り組むことの２つに分けられそうだ」という論点を整理する発言が出された。この意見を教師が取り上げたことで，２種類の意見に分かれることに児童が共感し，合意形成に向けて話合いを整理することができた。また，提案理由や学級力アンケートの結果に帰着する発言をした児童の意見を取り上げることで，論点からずれないように話合いを進めることができた。

話合いを進める中で，児童Ａが，自分なりに言葉を工夫して話すものの，うまく周囲に伝わらない場面があった。うなずきながら聞く児童Ｂに教師が発言を促したところ，児童Ｂの説明によって，児童Ａの意見のよさに気付き，全体で共感することができた。何とか伝えようとする児童Ａと，分かろうとして聞いていた児童Ｂの橋渡しをすることができ，普段は消極的な児童が，安心して発言をする機会を設けることができた。

Ⅰ期は，伝え合いについて消極的な反省（どちらともいえない・できなかった）を示す児童が学級の半数であった。しかし，実際は全体の場での発言はできていない児童でも，意見を交換する場面では，自分の考えや思いを伝えることができている様子が見受けられており，「できなかった」と答えた児童の振り返りノートの記述からも，挙手して発言できなかったことに対して，否定的な感想を持ったことが分かった。教師と児童の考える「伝える姿」に差異があったことは，Ⅱ期の実践への課題となった。

Ⅱ期は，意見を交換する際の観点を提示して，話合い活動に取り組ませた。全体の場での意見交換とは違い，自分の意見との相違点について，比べたり補足したりしながら伝える活動ができた。また，振り返りノートの記述から，これまで全体での話合いの中で発言ができていないと感じていた児童や，自分の考えを持ちながらも発言に消極的だった児童が，１時間の中で挙手以外の場面でも発言することに自信を持てたことが分かった。Ⅱ期では95％の児童から，伝えることについて肯定的な評価を得ることができた（図３）。

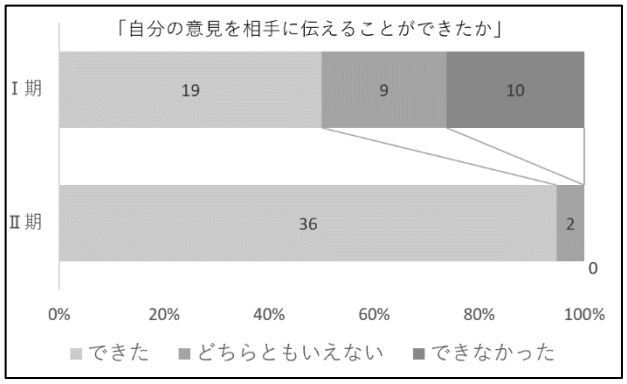

図３　話合い活動シート自己評価から

(2) 児童一人一人の意見を共有する工夫について

①　交流タイムの工夫

「比べ合う」の段階では，自分の意見と同じ人，違う人と交流すること等の観点を持たせて交流タイムを行った。そのことにより，話合いの論点について意識させることができた。また，児童同士の意見をより共有できるよう，タブレット端末と大型ＴＶを活用し，児童の意見が互いにリアルタイムで分かるように表示して交流タイムの学習に取り組ませた。

児童は，話合い活動シートを事前に書くことで，本時の議題についてじっくりと考えて，話合い活動に臨むことができていた。また，「出し合う」段階で多数の意見が出されるなど，それまで消極的だった児童も発

言する姿が見られた。図４に示した振り返りについてのアンケートより，Ⅰ期は84%，Ⅱ期は92%の児童がパワーアップの方法を考えることができたことが分かった。

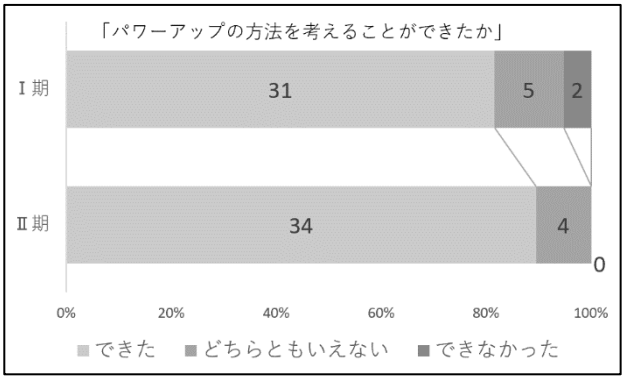

図４　話合い活動シート自己評価から「パワーアップの方法を考えることができたか。」

Ⅰ期は，ヒント集とその裏面にあるホワイトボードを活用して話合い活動を行うことで，話合いの進め方が定着した。

Ⅱ期は，学習支援ソフトのアプリケーションを使って，タブレット端末を活用した。このアプリケーションソフトを活用することにより，児童一人一人の考えを色分けして可視化し，分類することで，児童はリアルタイムで誰がどんな意見を持っているかを知ることができた。そのため，意見を交換する場面では，目的意識を持って，様々な意見の児童と交流する姿が見受けられた。また，話合い活動では，クラス全体の意見に偏りが見られたが，少数派の意見に耳を傾ける姿や，自分が少数派だからこそ意見のよさを分かってもらおうと，これまではなかなか意見が言えない児童が力説する姿なども見られた。

②　「まとめる」の段階の工夫

授業実践Ⅰでは，「まとめる」の段階の前に意見を交換する場面を設けた。様々な意見交換が行われていたが，「まとめる」の段階の発言が，「比べ合う」の段階の発言とほとんど変わらず，効率的に話合い活動を展開することができなかった。この反省を生かし，授業実践Ⅱの「まとめる」の段階では，図５のように，交流タイムを経てどのような意見に共感したかや，誰のどんな意見で自分の考えが変わったか，または補足されたかなどについて議論することとし，合意形成までの過程がより充実するように，内容の改善を図った。また，話合い活動で決まったことの実践について，振り返りノートを活用してじっくりと振り返らせ，その結果を全体にフィードバックし，実践から分かる課題や成果を次の話合い活動につなげられるようにした。

Ⅱ期の話合い活動では，「まとめる」の段階に入る前に，「Ａさんの意見で考えが変わった」「Ｂさんに自分の意見のよさを教えてもらった」等の意見も取り上げるように留意したことで，特に挙手をして発言ができなかった児童の考えも，全体の場で共有することができた。

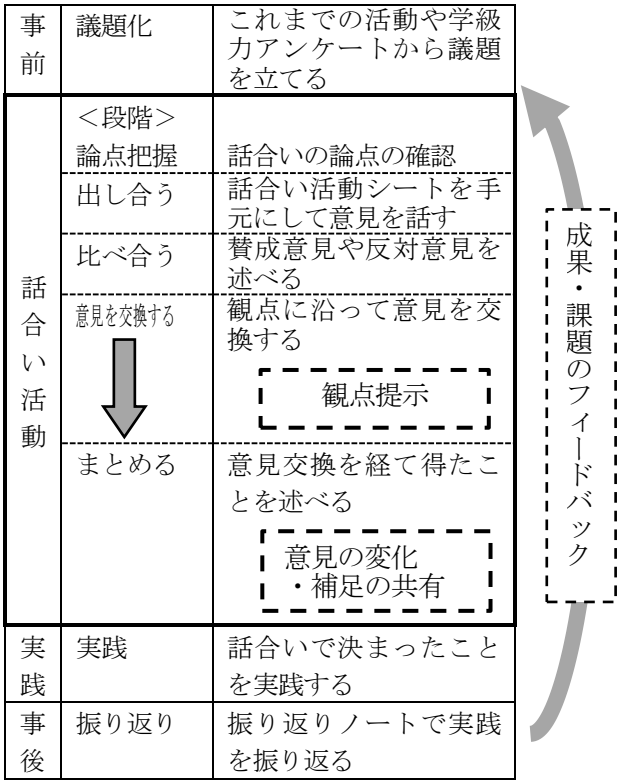

図５　話合い活動の流れと実践事後のつながり

⑶　自分や友達のよさを実感できる振り返りの工夫について

①　学級力アンケートの実施

学級力アンケートを月に１回実施した。アンケート結果は，学級の様子を数値化して全員で共有するための材料として活用し，実践Ⅰでは，教師が議題を作るきっかけとして，実践Ⅱでは，児童が議題を考える要素として，授業の導入等で提示した。

学級力アンケートの結果から，児童は客観的に学級の現状を知ることができ，話合いの議題を考える際には「自分たちの課題や目標」として，話合い活動への必要性を感じることができた。また，アンケートの結果を蓄積して表示することで，話合い活動で実践をしたことの効果を振り返ることができた。実践Ⅱでは，学級力アンケートの項目にある「相手を受け入れる力」をパワーアップさせる取組について話合いをした。様々な意見の比較検討が行われ，「相手を知る要素のある遊びにみんなで協力して取り組めば，相手を受け入れる力がついて５年２組はパワーアップできる」という内容で，学級としての合意形成を図ることができた。また，全体の話合いでは自分の考えが通らなかった児童も，実践後の振り返りノートには「ぼくは，今日の取組で，相手を受け入れる力が深まったと思います」や「友達の話を聞いて進められたから，相手を受け入れる力がパワーアップしたと思います」などの記述が見られた。実践後の学級力アンケートの結果で「相手を受け入れる」の項目の数値が上がったことからも，児童は，自分たちで決めたことの実践を通して，次の活

動への意欲を持ったり，話合い活動のよさを実感したりすることができたと考えられる。

②　絆アンケートの結果分析

児童の変容の見取りと考察については，宮城県総合教育センターホームページで紹介されている『よりよい人間関係を主体的に築く児童生徒を育成する「絆づくり」プログラム』の「絆アンケート」を活用した。絆アンケートは，１回目を分散登校後の６月に，２回目をⅡ期の実践後である 11 月に実施した。Ⅰ期からⅡ期への変容では，「他の人と意見が違っていても，自分の意見や考えを言っています」の項目の肯定的な評価が約 60%から 90%強へとポイントが向上し，「一人一人の考えや性格などに違いがあることを大切にしています」の項目の肯定的な評価が約 100%の結果となった。学級活動での取り組みを軸として，周囲の考えに流されずに自分の考えを持ったり，相手の気持ちや考えを理解して聞いたりするなど，学校生活そのものの質が向上したと考えられる。

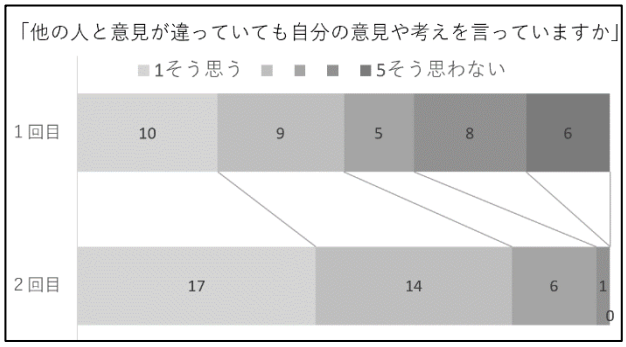

図６　絆アンケートの結果から

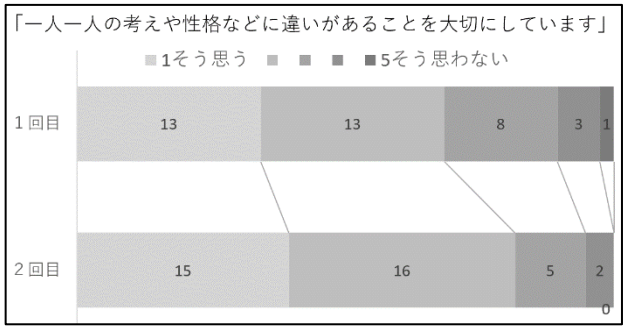

図７　絆アンケートの結果から

③　振り返りノートの継続的な取組

自分とじっくりと向き合って１日を振り返ることができるよう，帰りの会で１日の振り返りについて書く時間を設定し，継続して取り組ませた。最初は，短い文や感想で終わる児童が多かったが，自分の行動や気持ち，次への目標を書く児童が少しずつ増えてきた。児童のノートへコメントを入れ，児童の日々の取組について励ました。

「頑張った」「すごかった」だけでなく，「今日の会議は，みんなの話の聞き方がよかったから，いつもよりレベルアップしていたと思う」「私は人前で意見を言えないけど，交流タイムで自分と同じ意見の人，ちがう意見の人と積極的に話すようにした。前回より成長したなと思った」など，本時の目標の達成度に触れて振り返りをする記述が見られた。また，自身の振り返りだけでなく，「〇〇さんが，話すときは自分の意見と相手の意見を交えながら言い，温かい言葉を言いながらきいてたからすごいと思った」「ぼくは，自分の説明で３人の人を説得できたけど，〇〇さんの説明の仕方がうまかった」など，友達の活躍について振り返る文章も多数見られた。児童全体にフィードバックし，次時の話合い活動や計画的な実践につなげるよう心掛けた。

４　研修の成果と今後の課題

本研究では，学級活動における話合い活動の工夫に焦点を当て，３つの手立てを柱として多様な考えを認め合う児童の育成を目指した。学級力アンケートや絆アンケートの分析，振り返りノートの日々の点検等を通して，児童一人一人の実態を的確に把握しながら，学級活動や常時活動に取り組ませてきたことで，児童は，相手を意識した話し方や聞き方ができるようになった。また，自分をじっくり振り返ることで，自分自身の成長や友達のよさ，学級全体のパワーアップを実感することができている。一方，話合いの成果や課題をフィードバックし，次回の活動につなげる段階まで，十分に取り組むことができなかった。話合いの合意形成を図った上で，学級全員で決めたことを全員で役割を担いながら実践することで，より大きな自己有用感が生まれるものと考える。今後は，話合い活動と実践とのつながりをより大切にするとともに，児童が必要性を感じ，本音で話し合えるような議題の設定の仕方について授業実践を重ねて追及していきたい。

多様な考えを認め合った上での，合意形成に至るまでの話合い活動には，様々な形がある。児童一人一人が等しく合意形成に関わり，多様な考えを認め合える授業づくりについて，今後も研鑽を重ねながら，指導力の向上に努めていきたい。

【引用・参考文献】

1)　国立教育政策研究所教育課程研究センター：みんなで，よりよい学級・学校生活をつくる特別活動
2)　岩瀬直樹　ちょんせいこ：「振り返りジャーナル」で子どもとつながるクラス運営
3)　新潟大学附属新潟小学校：「学級力アンケート」
4)　宮城県総合教育センター：「絆アンケート」

【図表等の許諾について】

図１，２，３，４，６，７は所属校校長と相談の上，氏名は掲載しないという条件で資料として活用することとした。